

戦火に散ったアスリート

米軍も命惜しんだ オリンピックの英雄

西竹一

冬のオリンピックが終わったかと思えば、夏はサッカー・ワールドカップと、今年はスポーツ界のビッグイベントが二つ。どんなヒーローが登場するのか、楽しみが尽きない。日本には昭和初期、世界的なヒーローが多数存在した。「フジヤマのトビウオ」『暁の超特急』さらには陸上・跳躍の南部忠平に水泳の前畑秀子。彼らと同じ時期に、映画『硫黄島からの手紙』で準主役として脚光を浴びた西竹一中佐、通称「バロン西」もいた。1932（昭和7）年のロサンゼルス五輪、馬術・大障害飛越で優勝。世界的な知名度を誇った西も、太平洋戦争末期に硫黄島で壮絶な最期を遂げた。

（新聞うすみ火・吉岡雅史）

優勝インタビューで 私たちは勝った

西は1902（明治35）年、東京・麻布の裕福な家庭に生まれ育った。なにしろ父・徳二郎は男爵（バロン）で、外務大臣も務めた人物。10歳の時に、その父が他界し、家督を継いだ。十代で高級バイク・ハーレーダビッドソンを乗り回す派手な私生活の半面、性格はさっぱりしていたという。

陸軍士官学校から騎兵第一連隊へ入隊。欧州へ出向いた際に、イタリアで愛馬・ウラヌスと出会った。額に星型の模様があったため、天王星の意味であるウ

ラヌスと名づけた。その2年後、ロス五輪は開催された。

馬術の大障害飛越とは、簡単に言うると大小19の水郷や障害をクリアし、減点方式で行う競技。大会最終日に設定されていたというから、五輪競技の花形中の花形、さしずめ現代のマラソンのような扱いだった。

西は、ラスト11番目に登場し、減点8でフィニッシュ。華麗な演技にスタンドを埋め尽くした10万人の観客は魅了された。それまでのトップは米國・チェンバレンの減点12。圧巻の金メダル獲得に「バロン・ニシ、バロン・ニシ」のコールが沸

き起る。西は優勝インタビューで「We won the year」、つまり「私たちは勝った」と、真つ先に口にした。私ではなく、私たちである。人馬一体、二人三脚……いかに西とウラヌスとの相性がよかったのかを示すコメントである。

大事な部下を2人も 死なせてしまった

馬術で日本人のメダル獲得は、あとにも先にも西ひとり。8月16日付の東京日日新聞（現在の毎日新聞）夕刊で「天晴れ西中尉 正に天馬空を行く 大障碍に優勝 花々し若武者の神技」と、見出しを何本も並べ、偉業を報じている。日本は陸上という、水上という、立派な成績を取っているのに帝国軍人たる私がどうして、おめおめ負けることができよう。（中略）私の馬をほめてやって下さい。

西の登場まで、日本選手団が獲得したメダルは金6、銀7、銅4。17個の内訳は競泳が11個、陸上が6個だった。新聞記事に掲載された談話からも、西のプライドの高さ、それと同時にウラヌスへの思いが伝わってくる。

4年後のベルリン五輪にも西は出場し、個人戦は落馬。団体戦で6位入賞と、辛うじて面目を保ったが、ウラヌスともども体力の低下は否めなかった。そして時代は戦争への一途をたどり、技術の発展とともに馬は武器としての価値を失い、騎兵隊も削減。西の所属も戦車隊へと変わった。



珍しい家族とのひとこま

太平洋戦争末期、西の所属する部隊は当初、サイパンを目指した。しかし、釜山で米軍上陸の知らせを受け、急ぎよ硫黄島に行き先変更。最初に乗った輸送船は魚雷を受けて沈没した。750人いた西の部下のうち、2人が命を落としていた。

再準備のため戻った横浜で、周りの将校が西を励まそうと「犠牲者が少なくてもよかったです」と声をかけた。すると西は「大事な部下を2人も死なせてしまった大変なことだ」と語気を荒げたという。世間知らずのボンボンなどでは、決してなかったのだ。

再出撃までの間に、西は時間を作り、東京で余生を送っていたウラヌスに会いに行つた。ウラヌスは西が姿を見せる前に、靴音で主人の到来を察知して喜んだという。

西の長男・泰徳さんが「電話で済ませて下さい」と、なんとか取材に答えてくれたのは、3年前のこと。82歳になる現在も、硫黄島協会副会長として、年1回の慰霊・遺骨収集のため、本州から1250キロ離れた灼熱の島に向かっている。

オリンピックの英雄 君を失うことは惜しい

泰徳さんが最後に父を見たのは17歳の時。「もし硫黄島でアメリカに負けたらえらいことになる」と、西は話したという。

西は武子夫人との間に1男2女をも



軍服姿のバロン西。愛馬ウラヌスと

うけ、存命なのは泰徳さんだけである。泰徳さんが話した父の印象は「天衣無縫、豪放磊落。子どもみたいなところもあれば、厳しいところもあった」というもの。

ある日、久しぶりに外地から自宅に帰つた西は、泰徳さんの成長に目を見張り、突然、相撲を取ろうと言いつつ。夫人がこの日のために新調したふすまや障子などお構いなし。大はしゃぎで相撲など取つたものだから、ふすまも障子も、瞬く間にボロボロである。

「母がそれをしかると、父は『分かった』と言って、筆と新しい紙を持って来て、文字を書き始めました。たいそう立派な唐紙になって、最後に署名すると、私にも署名しろと言います。すると、たまたま私の字の方が大きかったものですから、

「おい、相撲に負けておいて、生意気な奴だ」と、また取っ組み合いが始まりました」

2度目の出撃で硫黄島に上陸したが、すでに日本軍2万3000人に対し、米軍の兵力は25万と、10倍以上。むざむざ殺されに行くようなものだった。

終戦5カ月前の45（昭和20）年3月、西が率いる第26連隊は17日に通信が途絶え、22日に全滅したとされる。それまで連日、米軍は投降勧告を行つたが、その内容が後世に伝えられるシーンとなつた。

「オリンピックの英雄、バロン西。君を失うことは惜しい。こちらに来なさい。我々は君を手厚く扱う」

連隊長の西は、呼びかけに応じなかった。銃弾を受けて倒れたか、あるいは部

下とともに自決したと、最期には諸説ある。ただ西は戦場でも、ウラヌスのためがみを片時も離さなかった。そして、後を追うように、ウラヌスが逝つたのは、西の戦死から6日後だった。

戦後、多くの人が西の死を悲しみ、「捕虜になつても、生きて帰つてほしかった」と、遺族に語りかけた。その都度、武子夫人は「部下をたくさん死なせておいて、自分だけ生きて帰つてきたりすると、きつとあの人は気になつてしまつたでしょう」と、毅然と答えたという。

硫黄島の戦死者は日本軍が2万129人。実に86%が酷暑の島で倒れたわけだ。その半数以上がいまだ、残されたまま。その中に西の骨もあるわけで、老いた息子の願いは、いつか父を家に連れて帰ることだ。

いみせいの タテマ文化論

